

令和4年度 松本市青少年問題・いじめ問題対策連絡協議会 議事録

1 日時

令和4年7月25日（月） 午後3時～午後4時30分まで

2 会場

松本市役所大会議室

3 出席者

(1) 出席委員

臥雲市長（会長）、伊佐治教育長（副会長）、杉本委員、田中委員、宮坂委員、藤沢委員、近藤委員、井坪委員、幅委員、鳥谷越委員、菱田委員、滝沢委員、宮林委員、倉田委員、赤井委員、丸山委員、鳥居委員、白井委員、上嶋委員、野原委員、野澤委員、東本委員、小林委員、宮下委員、安藤委員

（30名中上記25名が出席し、過半数の出席があるため、松本市青少年問題・いじめ問題対策連絡協議会条例5条2項の規定により、会議成立）

(2) 事務局・関係課

ア 事務局 こども部長、こども育成課長、こども政策担当係長、担当者

イ 関係課 教育監兼学校支援室長、こども福祉課長、教育政策課長、生涯学習課長、食品・生活衛生課長

4 会長あいさつ

各団体の代表の皆様におかれましては、日頃から子どもへの支援にご協力いただき感謝いたします。

この会議は、青少年やいじめ問題の総合的施策の調査審議を行うとともに、関係する機関や団体の皆様との連携を図ることを、目的として開催するものです。

コロナの2年数カ月を経て、改めて今の日本において、子どもによる問題、子どもに対する政策というものが、最重要課題として位置付けられ、来年4月からはこども家庭庁も設置されます。

2021年の出生数が81万人程度と、コロナの影響もあってか、前年から3万人近く減っています。超少子化がさらに加速するという現状の中で、松本市も去年1年間に生まれた子どもが1,600人を割り込みました。

松本市としては、改めて子ども・若者・教育に関する分野を市政の1丁目1番地と位置付け、2030年に向けて、集中的に政策展開を図っていかなければいけないと考えております。

今年2月に策定した教育大綱におきましても、子どもが主人公ということを明確に打ち出し、学校現場のみならず、地域で子どもの学びを支える、そうした取り組みを進めていこうとしております。

今、子どもたちが、いわゆる学力という言葉にとどまらない、非認知的能力、想像力、コミュニケーション能力といった、そうした様々な体験を積み重ねることで、力を培っていく分野を、改めて子どもたちの学び・教育に位置付けようとしております。

そのためには、全ての子どもたちがいじめの対象にならない、あるいは健全に育まれる環境を与えられるといったことを、ぜひ皆様方とともに作り上げて参りたいと思っております。

本日は、松本市から青少年やいじめに関する事業を中心に報告し、その上で皆様と情報共有し、コロナ禍からの回復、日常への回帰を進めようとする、この令和4年度における松本市の子ども・教育政策の展開について、忌憚ないご意見をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

5 議事

【会長】

それでは、議事に入ります。はじめに、青少年健全育成事業について、事務局から一括して説明をお願いいたします。

《事務局資料に基づいて説明》

【会長】

少し長い時間になりましたが、子ども、青少年に関しての松本市の7つの取り組み、テーマについて各担当課から説明いたしました。

今、報告がありましたことも踏まえながら、それぞれの活動現場で直面している課題や今後の展望について、幅広くご意見をいただきたいと思います。

それでは、まず学校現場のお話をいただければと思います。小学校長会、現状そして課題等でお感じになっていることがあればお願いいたします。

【委員】

小学校長会から発言させていただきます。

一番心配なことは、コロナ禍で子どもたちが我慢をしているということで、それがこの3年間ずっと続いています。

1学期も5年生のキャンプや、発表の準備をしていた参観日が中止となっています。2学期の修学旅行に向けて、一生懸命準備をしておりますが、それもどうなるのかわからない中で、いろんなことを我慢していることを心配しております。

そのような状況の中、子どもたちが十分満足して学校生活を送れているのか。あるいは、自分のやりたいことが思うようにできない中で、気持ちがイライラしてしまったりしていないか。お家の方も仕事がうまく順調にいかないようなことが、子どもたちの虐待に繋がっていないだろうか心配になります。

学校の中でいえば、そういう子どもたちのイライラが、つい友達をいじめてしまうようなことに繋がっていないだろうか。そういった子どもの心の成長について、心配する部分が非常に多くなっています。

マスクをし続け、友達の顔も普通にわからない生活の中、子どもたちがこれから健全に育っていくのかということについて、私たちの責任は大きいと感じています。

【会長】

ありがとうございます。

今、子どもには我慢を強いており、その結果が虐待やいじめということに繋がっていないかというご発言がありました。先ほどの調査報告などを見る限り、大きく顕著に出ているわけではないと窥えますが、一方で、そうした兆候を注意して見ていく必要があるのではないかと、今のご発言を聞きながら、感じました。

それでは、中学校長会からもお願いいたします。

【委員】

中学校長会から発言させていただきます。

小学校の現状をお話しいただきましたが、中学校も同じで、コロナ禍で、子どもたちの心が内向きになってしまったと感じています。

先ほど、市から報告がありましたが、自己肯定感を高めるために、どうしても経験をさせてあげたいと思っています。ところがその経験の場がとても少なくなっています。

学校でも子どもたちの心を育てるためにも、経験の場を作っていきたいと思えますし、また、松本市の施策の中で、様々なことをやっていただいていることは本当にありがたいと思っています。

小学校、中学校の子どもたちを見て、課題と感ずることは、中学校を卒業した後、うまく高校に繋げてあげられない生徒がいるということです。家にこもってしまったり、外に出て行かない子どもを、いきなり社会へ繋げていくというのは難しいところであり、そこでの繋がりが重要であると思えます。

【会長】

中学校長会から、中学校卒業後更にその先というお話がありました。その点につきまして、高等学校長会の代表からお話をお願いいたします。

【委員】

高等学校長会から発言させていただきます。

小中学校の校長先生のお話や会長のお話のように、子どもたちが経験をする場がとても少なくなってしまうことを、とても申し訳なく、また悲しく思っております。

生徒に、コロナによって悲しい思いや、かわいそうな思いをさせてしまってるねと言うと、生徒たちは、私たちはかわいそうではないと言います。生徒や保護者たちはそういうふうに見ないでくれと言います。彼らは今、この現状を精一杯生きており、私はそれ以降、生徒はかわいそうだとは見ないように、一生懸命生きてる子どもたちを応援したいと思うようにしています。

高校へ入って来る前の生徒について、私は、松本市がこれだけ丁寧にやっていることにびっくりし、感動をしながら見させていただきました。

私は地元が長野市で、長野市から通っていますが、長野市や須坂市ではこのように高校が関わる機会というものがないものですから、接点を設けていただいたことに感謝申し上げたいと思います。

高校に入ってきて、不登校を経験している生徒などがそのままうまく学校にはまるかという、うまくいかない例もあります。逆に、中学校や高校で何もなかったのに、突然、自我の芽生えか、学校に来なくなる生徒もいます。

その反面、小中学校で不登校等を経験した生徒が、何もなかったかのように卒業していく場合もあります。何がどう作用するのか全然わかりません。生徒の心に落ちる物や、経験や、いろんな人との出会いによって、子どもたちは自分なりに人生を切り開いていくんだというを感じています。私たち教員は、不登校になってしまったり、登校することを渋っている生徒についても、全日制だけに来るということではなく、例えば、通信制高校やN高校、N高校はネット上で遠足をするんですが、そういう方法についてもいろいろ考えてもらっています。機会の一つではないという状況があるので、全日制でつまづいた生徒には、なるべく在籍を切らないように、中途退学を選択しないように転学の方角を進め、子どもたちの学びが継続できるよう支援したいと思っています。そして、現在では、昔よりも高校生の中退率はかなり減っています。

たくさんの方が今ここにあるということ、学びの場は一つではないということを生徒や保護者に伝えながら、学びが継続できるように、そして、いろんな経験を持って社会に出てく子どもがいていいんだということ、念頭におきながら子どもを支援して参りたいと思っています。

【会長】

ありがとうございました。

学びの選択肢、さらには、中学と高校との連携というお話もありました。松本秀峰中等学校は中高一貫校ということに取り組まれています、その立場からお願いいたします。

【委員】

松本秀峰中等学校から発言させていただきます。

今年で開校13年目になりますが、7回卒業生を出しました。

これまでの生徒の様子を見ていますと、本校では6年間同じ仲間で過ごし、更に先輩たちとの関係性も非常に強い中で数年間過ごしていますから、そういう意味では一般的な中学校から高校受験をして、高校へ行く生徒たちの人間関係とは違った人間関係の中で過ごしていると実感しております。

特に思うのが、お互いをリスペクトし合い、お互いのいいも悪いも全てわかった上で6年間付き合っただけ卒業していくことです。そういう意味では自己肯定感というのは、6年間の中で培うことができていると感じております。全国的にも中高一貫校が増えていますが、どこの学校も同じような実感を持っているのではないかと感じております。

コロナ禍で本校でも様々な制限がありますが、特に感じるのは、キャリア教育、いわゆる進路研修的なものができなくなっているということです。いろいろ工夫をしながらやっていますが、その中でも、特に、先輩たちの話を聞く機会をできるだけ多くして、中学生のうちから10年後、20年後を考えさせるような工夫をしています。この2年間、3年間でできない時期もありましたが、本年もなんとかここまでやってきて、それまでと同等の進路に対する考えを培うことができるように支援しています。

先ほどの報告の16ページにありました、子どもの自己肯定感について、過去と比べると上がっています。一つお聞きできればと思いますが、この背景をどのようにお考えでしょうか。私は、コロナ禍では、逆に他者との関係性が希薄になることで自己肯定感が下がってしまうのではないかと感じます。

質問になってしまいますが、お願いします。

【会長】

ありがとうございます。

私もこの調査に目を通したときに、実は、調査結果が前回までとがらりと変わっており、回答を幅広くインターネットによって行ったことで、回答していただいている方の割合が低くなっていると感じます。この調査結果から、そうしたことを織り込んだ上で数字を見ないといけないということを、まず前提として受け止めています。

担当課からお答えすることがあればお願いいたします。

【こども育成課】

担当課でも、今回、回答方式が変わっている中で、回答を寄せた人の層では自己肯定感が高くなっているというイメージを持っています。

自分肯定感の向上については、コロナ禍で家にいる機会が多くなったり、ご家族も自宅で仕事をしたりという形の中で、親子で話をする機会が増えてきている部分があり、担当課としては、その中で安心して自分を受け止められているのではないかと推測しております。

【委員】

今お聞きした中で、共感する部分がありまして、結局は他者との濃密な関係性を持っている子どもというのは、自己肯定感が高いのではないかと考えています。

それが家族であれ、友人であれ、先輩であれ、地域の人であれ、他者との関係性を子どもたちに繋げていけるか、続けていけるかというのが大人の課題の一つであると感じております。

【会長】

ここまで松本市内の先生方からご発言をいただきました。
保護者の立場で、PTA連合会にご発言をお願いします。

【委員】

PTA連合会より発言させていただきます。

私には、高校1年生、中学3年生と小学校4年生の子どもがおります。コロナ禍の中で、子どもたちの学校行事が中止になることがありました。高校1年生の子どもは修学旅行が中止となり、中学1年生の子は、県外から県内の登山に変更になりました。高校1年生の子の文化祭の伝統ある親子綱引き大会が、コロナ禍で中止になってしまい、子どもも私たち保護者もがっかりする方が多くいました。それでも、子どもたちは文化祭の2日間で燃え尽き、立派に成長を見せてくれました。修学旅行も県外ではなく、県内での実施となりましたが、参加できたことは宝のような体験となりました。参観日もなかなか行かれませんでした。学校の卒業式に子どもたちの写真を見た時にとっても感動しました。コロナ禍の中でも、先生方が工夫してくださっていることを実感しています。

その中で、大学受験の体験入学が、コロナ禍で中止になってしまった時には、子どもの選択肢が少し奪われてしまったと感じました。

家庭で気をつけたいと思っているのは、自分の家は農家で、家に帰って来たときには家族が常にいたので、子どもたちが家に帰って来る時間には必ず家にいるという仕事を、コロナ禍になった昨年からは選ぶ工夫をしています。

【会長】

ありがとうございます。

先ほど松本秀峰中等学校から、他者との関係性の構築の重要性が増しているというご指摘がありました。PTA連合会からは他者との関係性を育むことについては文化祭や修学旅行など、授業以外の部分でも、学校が果たす役割が大きいというご指摘をいただきました。

教育長、まだコロナが完全に収束するということにはなかなかならないわけですが、一方で、政府がここへきて、社会経済活動を維持し続けていくという方針を示しています。これからの夏休みやその先を見据えたときに、学校の伝統行事等について、大きな方針としてはどのように考えておられますか。

【教育長】

コロナは、4月から第6波ということで拡大しましたが、校長会の先生方、市長と相談のうえ、まん延防止の重点措置にならない限りは、子どもたちの行事を含めた学びは、原則止めないことにしています。

中学3年生は、中学時代の全ての行事が中止になるという中で過ごしてきましたので、まん延防止にならない限りは、できる限り活動を続けたいと考えています。学校現場では、当初は1人陽性者が出ると学級閉鎖にしなくてはいけないということでしたが、6月からは緩和しており、現在は場面ごとに感染対策を行いながら、行事をできる限り行うという方針であります。

夏休みが明けますと、感染状況が厳しくなり、2学期のスタートから学級閉鎖等が増えてしまう状況は考えられますが、この2年半で得た知見が学校現場にもありますので、できる限り子どもたちが希望を持てる学校生活を送れるよう取り組んでいきたいと思っております。

【会長】

この他いじめや非行というような観点で、地域の子供たちを見守るという立場で民生委員・児童委員協議会からご発言いただきたいと思います。

【委員】

民生委員・児童委員協議会から発言させていただきます。

私たちは、子どもたちの健全な育成を願い、影ながら活動しておりますが、コロナ禍で、学校、家、地域の連携がなかなか難しくなっております。学校にもほとんど行けておりませんし、行事等があっても、保護者と学校という範囲の中で行われてますから、地域の者がほとんど参加できないような状況になっております。そのような中、私たちは子どもたちの登下校を見守ったり、声かけをしながら子どもたちの様子を本当に遠くから見るというような感じになっています。

こちらで声かけをすれば、子どもたちから明るく元気よくあいさつが返ってきて、私たちは子どもたちが一生懸命頑張って学校生活を送っているということを励みに、子どもたちの登下校を見守ってます。

地域におきましては、子どもを取り巻く環境が変化し、深刻化、複雑化、多様化しており、民生児童委員の立場で家庭の中まで入ることが難しい状況です。学校、家庭、地域の3者で連携しながら、子供たちの成長に関わっていけたらいいなど常に思っていますが、このコロナ禍であまりできていない状況です。

【会長】

ありがとうございます。

生徒指導の立場で、専門指導員としてお感じになることがあればお話いただけますでしょうか。

【委員】

中信教育事務所の生徒指導専門指導員より発言させていただきます。

松本市の様々な青少年の居場所等の施策を拝見しまして、県ではできない、市町村ならではの子どもや家庭に寄り添った施策がたくさん行われていることに敬意を表したいと思います。

県の事務所では、所管の市町村にスクールカウンセラーや、ソーシャルワーカー等を派遣とすることを、主な役割としています。コロナのことを多くの皆様が述べていますが、不登校をデータ的に見ますと、右肩上がりの状態で、小中学校では増え、高校だけが、コロナ禍の影響で減少がみられます。小中学生がこれから高校に上がっていくということを考えますと、増加をしていく傾向が明らかであると思います。

そのような中で、県では不登校の子どもたちの居場所、さらに学校現場というものの役割について、学びの場は学校だけではなく、様々なフリースクールや中間教室を、生徒の状態に合わせて学びの場にしていこうとしています。中間教室は、フリースクールなども含め、その居場所を出席とする、これは少し難しいことですが、何かしらの評価をしていければよいです。生徒を、学校に何とか戻していくという指導ではなく、子どもたちはいずれの居場所においても、自己肯定感や自尊心、それから社会に出ていくための他者と協働する力などを身につけることができる。そして、ゆくゆくは子どもたちが自立した一人の人間として、社会で生きていける力を身につけることが最終目標となると捉えています。

身近に支援の受け皿がたくさんあり、居場所もたくさん用意していただいているということは、県が目指す方向とマッチしていると思います。

県の事務所としても、こういった情報を支援者の方へ提供しながら、先生方には、たくさん大人の支援、受け皿があり、何とか自分たちの中で導いていくというスタンスから少し視野を広げて、いろいろな支援の広がりを持てる、その方向に動いていけるお手伝いしていきたいと思いました。

【会長】

ありがとうございます。

学びの場は学校だけではないということで、松本市には不登校支援を10年間担っていただいている「はぐるッポ」という団体があり、また子どもの居場所の取り組みもできるだけ多角的に進めようと取り組んでいます。昔からの子どもの受け皿の一つに、子ども会というものもございます。子ども会の立場から見て、子どもの居場所や、学校以外での地域の支えを、今現在どのように見ておられますでしょうか。

【委員】

子ども会育成連合会より発言させていただきます。

松本市子ども会育成連合会の組織の中には、ジュニア・リーダー会という組織があり、小学校6年生から中学生、高校生を対象にして、現在35名が在籍しております。それからジュニア・リーダーを卒業した20代の大学生、社会人がシニアリーダーとして、ジュニア・リーダーを支えています。

コロナ禍ではありますが、感染対策をしたうえで、研修会等を行い、異年齢の交流を図っております。

私も学校現場にいるときは、小学校、中学校という年齢の制限がありましたが、ジュニア・リーダー会のような小学生、中学生、高校生、それから20代の社会人が、一緒になって活動している場に立ち会う中で、年齢の枠にとらわれないこのような交流が大切であると感じるようになりました。

現在、コロナ禍のために各地区の伝統行事をやむなく中止せざるを得ないことがあります。今年の「青山様・ぼんぼん」につきましても、私の地区でも12町会中7町会が実施をする予定でしたが、ここへきて新型コロナ警戒レベルが4に上がったことで、かなりの数、ほとんどが取り止めという状況になっております。

コロナを無視もできませんが、やはり活動していかないいろいろな伝統も立ち消えになっていってしまうのではないかと危惧しております。

感染対策をしながら、子ども会の組織を使って、活動したいと思っております。

【会長】

ありがとうございます。

他にご発言いただける方がいらっしゃいましたら、お願いいたします。

《各委員から意見なし》

【会長】

様々のご意見をそれぞれのお立場からいただきました。

この2年数ヶ月、社会全体が行動を制約し、コロナの感染防止ということを最優先に取り組まざるを得ない状況が、日本全体で続いて参りました。そうした中で、先週から今週にかけて、少なくとも報道ベースで見ると、政府が、専門家を交え、

コロナ対策の大きな転換を図ろうとしているということが窺えます。どのような転換かと言えば、行動制限をせずに社会経済活動を維持し続けること、そして医学的には、新型コロナを一般的な疾病として位置付ける検討を本格的に始め、そう遠くない時期に結論をしっかりと出すんだと、このことが私は今、政府が大きく打ち出してきた方針だと考えております。そのことは、私たちがこの2年数ヶ月を経験をして今の時点にいることを考えたときに、妥当でそして進むべき道だと思います。

今、そうは言っても、様々な行事の見直しの動きも出始める一方、私は、大きな方向性としては、今申し上げたような方向性を是非、皆様方と共有して、できる限りこの夏以降の社会経済活動を維持し続け、子どもたちに経験の機会を、学びの機会を、遊びの機会を、体験の機会を与えてくということが非常に重要であるということ、皆様のお話を聞きながら改めて感じました。

今日、これだけの様々な立場の方にお集まりをいただいて、改めて子どもの問題を取り組んでいくにあたっては、学校が一つの中心であることは論を俟ちませんが、学校にとどまらない、幅広い立場の方が子どもに関わり、就学前、小学校、中学校、高校さらにはその先と、世代を超えて重層的な取り組みをしていくことが重要であると感じたところがございます。

ぜひ、コロナの2年数ヶ月を経験したがゆえに、こうした他者との関係性というものを、体験を通じてしっかり実現していくことを、改めて松本の子どもの問題を考える上で、しっかり取り組んで参りたいと思っております。

本日は様々な形でご意見をいただいたことに感謝を申し上げ、引き続き皆様方にお力添えをお願いをして、議事を終了させていただきます。

どうもありがとうございました。

《議事終了》